

# 「只見 移住物語」

専門技能（プロフェッショナル）編

編集・連絡先：只見町役場 地域創生課

TEL 0241-82-5220

FAX 0241-82-2117

# 「只見 移住物語」

## 専門技能（プロフェッショナル）編 目次

- 第一章 《移住はバイオリン作りをするためです。自然の気持ち良いところでバイオリンを作りたかったのです》  
風工房 手工バイオリン製作  
富川 智 様（68歳）
- 第二章 《一つ一つの料理に時間をかけて丹念に作りたい》  
ビストロ 叶屋 オーナー シェフ  
伊豆 真一 様（71歳）

## 「只見 移住物語」

### 風工房 手工バイオリン製作

#### 【移住者のご紹介】

- ・お名前：富川 <sup>ふかわ さとる</sup> 智様 68歳
- ・ご家族：富川 <sup>ふかわ ようこ</sup> 陽子様（妻 64歳）・長女・次女・長男
- ・いつ：2001年から富川 智様の定住スタート、奥様は神奈川県 横浜市 在住。
- ・どこから：神奈川県 横浜市
- ・どこへ：只見町 朝日地区 長浜区
- ・いましていること：バイオリン製作
- ・まえにしていたこと：商品開発系 サラリーマン



富川ご夫妻 自宅のベランダで

#### 【始まり】

移住する20年前からバイオリン製作の師匠について作り方を学んでいました。移住はバイオリン作りをするためです。自然の気持ち良いところでバイオリンを作りたかったのです。1998年から家を作りだし、1999年に完成。2001年から定住しました。

横浜はマンションなのでバイオリンを作る時に出る音や、匂いもありできなかったのです。作業部屋、木工を加工する部屋、ニス塗りの場所も、寝泊り生活の場所も必要になるので、横浜で借りるとなれば家賃も高額になるので、ここになりました。

私が作るものはプロフェッショナルの人達が使うものではなく、学生さんが使うような楽器です。でも、学生さんが使う楽器だとしても、それが学生さんの手元に届くまでには小売店なり、ディーラー、問屋が仲介としてはいます。教育ママの目も！ものすごく見る目が厳しいです。仲介を通さずに直接売る人もいますが、そのような人は年間1本か、2本売れるか売れないかの世界です。私はこれで食べていますから、売れなければ困るので、定期的に作ったものは必ず売れるようにしなければなりません。プロフェッショナルとしては、やはり問屋さんにバイオリンを出荷して、その売り上げで次のバイオリン材料を買い、また作ってゆく。小売店の希望を取り入れて。自分の我儘だけで作っては駄目です。

NHK の朝ドラで主人公が陶芸家になってゆく話がありましたね。ドラマの中の師匠が、主人公の女性に『あなたは陶芸をやりたいのですか？それとも陶芸家になりたいのですか？』という問いかけをする場面がありましたよね。一個作って陶芸をやりました、と言うのではなく、陶芸家としての生活をしたいと言う事なのですね。プロになると言うことです。私もバイオリン製作家になりたいと思いました。いまま修行中、生涯修行ですね。いまままでにバイオリン、ビオラ、チェロを合わせて130本位作りしました。(プロフェッショナルとしては) 少ない方です。

若い時は1年間で10本作っていましたが、それでもイタリアの師匠には(少ないと)笑われました。イタリアの職人はすごい人たちです。年間で20本位作りますから。イタリアには短い期間ですが修行に行きました。いまはインターネットもあるし、夜にメールで質問すれば、翌朝にはイタリアから返事が来ている、そのやり取りを繰り返す感じですか。師匠U氏は日本人なので日本語でのやり取りです。師匠を通してイタリア人の職人に質問を聞いてもらえることもできました。その師匠がいなければ、今の自分はいなかったと思います。本当にいろいろな人との関わり合いがあって、いまの私がいると思っています。

バイオリン製作の材料は、すべて輸入品です。バイオリンって、どこの山のどの木を使って初めてバイオリンの音になるっていう決まりごとがあります。例えばヨーロッパアルプスの南側斜面、イタリア側がいいということ、その木を使います。表板がモミの木で、裏板はカエデです。カエデと言っても日本のカエデとは違って軽いです。

日本の材料で作る人もいます。その方が良いと言う人も。自分で創るものは可愛いからです。でも売るとなるとまた別の話しです。ちゃんとしたバイオリンの音が出なければ売れません。日本の材料で作りましたと言っても、誰も珍重してはくれません。(智様)

## 【家族】

一緒にいこいの森キャンプ場（現 奥会津 ただみの森キャンプ場）に来ていましたので、土地を買うことについても、工房を建てることについても承知していました。

バイオリンの職人になるということはずっと前から、結婚して間もなくのころから言い続けていました。バイオリンの職人になるのは少し早い気もしたのですが、60歳から始めたのでは遅いと思いました。いずれ退職したら職人になるのだろうと思っていましたが10年前倒しになりましたね。（陽子様）

## 【準備】

移住先として只見を選んだ理由は、私は山が好きで、いこいの森キャンプ場（現 奥会津 ただみの森キャンプ場）によく夫婦で来ていました。町にT株式会社（本と森の交換のシステムを行う）という本屋さんがあるというので訪ね、そこで「工房を作るようなところはありますか」という話になり、この土地を紹介してもらいました。当時、この土地と、すぐ下に旧営林署の管理棟があり、売り出されていたのですが、新築を建てるつもりで、この土地を購入しました。斜面の土地が気に入ったのです。

家を建てるのに3年かけました。資金の問題もあり、少しずつ建てて行ったのですが、余り長い時間をかけると木材のひずみが出ると大工さんのアドバイスを受け、完成させ移住しました。移住で不安に感じたことは、なにもありません。田舎暮らしは慣れていました。家内は米沢の出身で、私も学生時代に米沢にいたので、米沢へ行く選択肢も考えましたが、米沢に行くと親戚付き合いが大変だと思い、途中で止まって只見に住むことになりました。

むしろ自分でバイオリンを作って売れるかもものすごい不安がありました。先ず、ちゃんとバイオリンが作れるか技術的な問題があり、さらにそれが売れるのだろうか不安でした。プロになってからイタリアの師匠Uさんから「どういう心構えでバイオリンを作らなければならないか」アドバイスを頂きました。クレモナ（イタリア半島の付け根部分 ロンバルディア州の手工バイオリンで名高い町、ミラノに近い）を訪れるに当たりUさんへメールを入れました。Uさんから『あなたにはもう教えることはありません。ただ心構えを知りたいのであればクレモナにいらっしゃい』と言われ、イタリアへ出発しました。師匠は技術的に『あれがダメ』と言うことは何も言いません。『そのようなやり方でもいいじゃないですか』といった指導を受けました。

移住する気持ちを固めたのは、勤めていた会社で希望退職の募集があり、それを機会に49歳で退職しました。仕事環境は厳しく、朝5時に家を出て、12時に帰宅するような生活でした。私が会社を辞めることについて家族の反対はありませんでした。1年間修行を積み50歳で只見に移住しました。（智様）

移住して工房を立てることは良かったのですが、会社を辞めると言われた時は、子供が大学に入る前だったので、これから大学生2人抱えてどうしようかと思いました。(陽子様)

当時(移住後)は2人分の国民年金を支払い、工房の維持費、生活費を入れなければならないので、ものすごく大変でした。それは生活を始めてから気が付きました。貯蓄で10年間くらいは賄うつもりでしたが、それが8年ほどで底をついてしまいました。本当に貧乏と言うのはこういうことだと思いましたね。(智様)

(バイオリン) 1本分の宅配便代だけは手元に残しておこうと思っていました。宅配便でバイオリンを送れば、その売り上げで何とかかなりです。宅配便のお金まで使ってしまうと、その先やりようがない。だから宅配便代として2,000円は取っておきました。

一度 宅配便代を支払って、出荷した後に200円残りました。草刈りをするためにガソリンを買った後、財布の中を見ると50円しか残っていなかった。本当に大変でした。作ったバイオリンはすべて買い取ってもらいました。もう売るものがなく、材料を売るしなくなり、材料を買ってもらったこともあります。売るとなると値段は二束三文です。それでも人柄の良い親方が現金で10万円分の材料を買ってくれて、しのげたことがありました。あの10万円は嬉しかったです。(智様)



工房にて、制作中のチェロと共に

#### 【現在】

年間を通してバイオリンの製作をしています。

移住して良かったと感じる事は、これは後で解ったことですが、只見の気候がバイオリン作りにとっても良いことです。一つは材料が冬場に乾燥しすぎないことです。冬場に乾燥しすぎると、ストックしてあるバイオリンの材料がひび割れてしまうのです。あと梅雨が短めなので、いつでもニス塗が出来ます。関東では梅雨時はニス塗が出来ないのです。ニスが白く濁ってしまうからです。こちらに来て気候がバイオリン作りにあっていることに気が付きました。長野県 松本は、日本の量産バイオリンのメッカですが、同じような事なのかもしれません。(智様)

### 【変化】

移住して自ら変わった事は、おしゃべりになったことです。

この家が展示室であり、また会食の場にもなります。一杯飲みながら話をする。毎週そんなことをしていたので、おしゃべりになりました。近所の方や集落の方と仲よくなり話が弾む感じです。『まあ寄ってお茶飲んで』なんて、マンションを訪ねてきた人を部屋に入れ、お茶を出して話すなんて、都会では考えられないことですが、ここでは平気にありますね。(智様)

玄関の前に大根とか白菜が沢山おいてあったこともありました。(陽子様)

学生時代にマンドリンクラブに入っていました。40年ぶりに大学の仲間とマンドリン合奏をもう一回してみようと言うことになり、ここ(工房)で当時のメンバーが7人集まり練習して、朝日保育所で演奏会を開いたことがあります。そんな感じで練習の場所にもなり、一般の住宅ではなかなかできないことですね。気が付いたらおしゃべりになっていました。(智様)

### 【将来】

いま腰が悪いので心配をしていますが、健康で、バイオリン製作を長く続けて欲しいです。  
(陽子様)

いまは体調が悪く休んでいますが、月に2回 横浜までチェロを習いに行っています。やはり一流の先生に習うと全然違います。自分の息子より若い先生です。メソッド(教授方法)も昔とは全然違って、試しに一か月レッスンを受けたものが、感動してしまい、もう2年通っています。(智様)

### 【不便】

暮らし始めて困ったことは、会津交通の定期バスがなくなってしまったことですね。

いまは雪んこタクシーと自然首都只見号がありますが、それができるまでの2年間 土日は動く手段が全くありませんでした。(智様)

ずいぶん山口まで自転車で行了きましたよ。山口まで行くとバス便がありますから。その時間に合わせて、山口まで行了きました。雨の日も自転車で往復しましたね。(陽子様)

自転車でむら湯によく行了きました。むら湯に入り、ビールを一杯飲んで、そこにいた方とおしゃべりして、帰ってくる。バス便が無くなってしまったあと田島に出るためにバイクを買いました。バイオリンを売りに行かなければならないじゃないですか。『月曜日ならお会いできます』というお店があって、そのために土曜日か、日曜日に移動しなければならない。自転車でバイオリンを背負って山口へ行くのは結構しんどいので中古の原付バイクを2万円で購入しました。足が悪くて転ぶと危ないので自転車もバイクも手放しましたが、いまは雪んこタクシーも自然首都只見号もあって昔より便利になりました。(智様)

自然首都只見号も予約なしで乗れるようになりましたしね。(陽子様)

### 【健康】

規則正しい生活をする事です。東洋医学の整体の先生から『歳を取ってからでも筋肉をつけることは可能だから、筋肉を付けるように一生懸命努力すれば治ります』とアドバイスを受けて、筋力をつけるトレーニングをしているのですが、これがなかなか続かない。  
(智様)

### 【アドバイス】

これから移住する方へアドバイスとしては、地域住人を尊重して、住まわせて頂いているという心構えが大切かと思います。実際には、このことを理解できるようになるまで自分も20年程の時間がかかりました。(智様)

### 【生活】

ここで子育てをするのは最高の環境だと思います。小学校、中学校、高校まで。子供も年寄りも大切にしているところだと思います。高校は、教育も就職指導も、丁寧ですね。  
(智様)

この子供たちはちゃんとあいさつをしてくれて、とても気持ちいいですよ。(陽子様)

### 【印象】

只見の自然環境は気に入っています。家内は米沢の出身で、私も学生時代に米沢にいたので、雪に対しては全然抵抗がありませんでした。「ここは雪が多いよ」と言われましたが、雪に慣れていましたし、当たり前だと思っていました。

サンマートがしている「たすかある便」がとても便利です。無料の買い物送迎車ですが、とても助かっています。この地区は火曜日、木曜日、土曜日の運行です。私は土曜日に

利用しています。いつも集落のおばちゃんと一緒にあって、行き帰りに色々な話をすると、またお友達が増えていいですね。

『どんなに素晴らしい自然環境であろうと、そこに親しい友人がいなかったら、そんなものなんの魅力もない...』としみじみ感じます。孤独が好きで自然の豊かなところに山小屋を作り一人で住みたいなんて考える人もいるかもしれないけど、そんなものは2週間住めば飽きてしまう。やはり、そこに気心知れた友達がいて初めて、魅力のある自然なのだろうなと感じます。(智様)

2020年6月21日 ご自宅(風工房)にてインタビュー  
インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博

## 「只見 移住物語」

ビストロ叶屋 オーナー シェフ

### 【移住者のご紹介】

- ・お名前：伊豆 真一 様 (71歳)
- ・ご家族：富子 様 (妻 67歳)、千穂 様 (長女 33歳)  
          楽太郎 君 (甲斐犬 7歳)
- ・いつ：2006年11月
- ・どこから：千葉県 浦安市
- ・どこへ：只見町 只見地区 叶津区
- ・いましていること：ビストロ叶屋 オーナー シェフ
- ・まえにしていたこと：株式会社オリエンタルランド (東京デズニーランド)  
                          舞浜 本社社員食堂 マネージャー



伊豆様 家族写真 ビストロ叶屋 1階客室にて撮影

## 【始まり】【準備】【家族】

栄養士の専門学校を卒業してからフレンチのコックを13年間、それから社員食堂のマネージャーを足かけ23年間やりました。勤め人としての最後の職場は株式会社オリエンタルランド（東京デズニーランド）舞浜 本社社員食堂で14年間 マネージャーとして働きました。そして、只見の手つかずの自然に導かれ2006年11月に、千葉県浦安市から移住しました。

高校の時から登山が趣味でした。ちなみに登山で海外遠征をした経験はありますが、海外で調理修業をしたことはありません。高校の時からアルパインクライミング（注1）をしていたのですが、30歳で結婚したのを機に本格的なアルパインクライミングは止めました。その後も登山は続け、やはり将来は山の麓で暮らしたいという希望を持っていました。

確か私が37歳くらいでしたから昭和61年ですか、縁があって長野県駒ヶ根市にあるJAICAの青年海外協力隊（注2）の研修施設の食堂の責任者を頼まれ、1年弱務めたことがあります。一口に駒ヶ根と言っても、南アルプスと中央アルプスに挟まれた伊那谷と言うところです。一般的には養命酒の工場があるところで知られています。

### （注1）アルパインクライミング

登山とクライミング両方の要素を合わせ持つ「登山スタイル」。目的は頂上へ登ることや岩壁自体に登ることにあり、道具を利用した人工登攀の技術を用いることもある。純粋な登攀に加え、安全確保技術などの高度なテクニックが必要になるため、非常に難易度が高い登山スタイルと言われている。

（注2）日本国政府が行う政府開発援助（ODA）の一環として、外務省所管の独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施する海外ボランティア派遣制度。

定年後は山の麓で暮らすことを考えていたので、全国を巡っては水と空気の良いところを探していました。駒ヶ根は単身赴任でしたが、その間に地元の方との交流も深まり、それが縁で将来住むための土地を購入しました。

少し道草になりますが、私は、料理を作ることが本当に好きです。今でもその気持ちは変わりありません。コックとしてお客様に『美味しかった』とか『良かった』と言われることが一番の喜びで、ずっと調理台の前に立っていたいと思っていました。しかし結婚をして、家族を持つようになれば、誰でも同じでしょうが、一家を支えるものとして、家族にとってより良い環境、選択を考えなければなりません。家族と過ごせる時間やお休みがきちんと取れて、より安定した職場、職制を求め始めました。その結果 学校給食や企業食堂の給食事業を展開していたある企業の社員食堂のマネージャーとして働き始めました。ほぼ昼食がメインの社員食堂で、1日1,000食から3,000食を提供するマネージャーです。ある時『オリエンタルランドで本社社員食堂のマネージャーを探しているのだけど、伊豆

さん、浦安に住んでいるなら、そこへ行ってもらえないだろうか』と打診を受けて、オリエンタルランド 本社社員食堂のマネージャーになりました。こののち、この社員食堂はオリエンタルランド直営へ移行するのですが、スタッフ全員そのまま残ることになりました。私もマネージャーとして残りました。

ここで話を元に戻しましょう。只見町を知るきっかけは、こんなことからでした。叶津番所（注3）のオーナーだったS氏は市川市（浦安の隣の市）に住んでおられ、山の同好会を持っていました。たまたまその同好会に入って、あちこちの山を登っていました。ある時S氏の会話の中で『南会津にこんなもの（叶津番所）を持っているのだよ』という話題が出て、それを機に2003年頃でしたか、叶津番所を拠点に周辺の山登りを始めました。

（注3）叶津番所

1643年（寛政10年）築といわれる建物、会津と越後を結ぶ八十里越の関所跡、福島県の重要文化財に指定されている。番所後方には築300年程度といわれる国重要文化財「旧五十嵐家住宅」がある。

私は三重県伊勢の生れなので、東京から北には馴染みがありませんでした。まあ長野県は、穂高の岸壁登攀で毎月訪れていましたし、冬山なら大町の山（北アルプス）にも行きました。毎月長野には山登りで行っていたので馴染みがありましたが、かたや東北、会津地方はほとんど訪れたことがなかったので新鮮でした。「森が深い」という印象を覚えています。

叶津番所を拠点に周辺の山を登り始めて、しばらくしたころだと思います。この家（現ビストロ叶屋）の元の所有者が、Sさんへ『誰か自宅を買ってくれる人はいないか』と声を掛けて、Sさんから私へ『築35年の家屋があるのだけど、どうだろう』というお話を頂きました。私は、2005年に、この家を購入しました。

駒ヶ根から只見に本拠地を移転させたことは、私一人で勝手に決め、進めてしまいましたので、あとから妻に怒られました。この家を購入する前に、妻を1回連れて来ていましたが、妻は駒ヶ根に住むつもりだったので『えっ！何で只見なの？只見ってどんなところなの』と言われました。

定年後に暮らすつもりで購入した駒ヶ根の土地は、只見への移動に伴い処分しました。家を購入して、2006年11月末に只見に移住するまでの1年間は、1か月に1回のペースで通いました。浦安から通い2～3日滞在して、戻るといった感じです。当時も犬（ミニチュアダックス:ボビー）を飼っていたので、どこか旅行に行こうとか、自然のところに遊びに行こうとしても国立公園では難しいし、旅館に宿泊するとしても犬連れで泊まれるところは少ないので『こんなところを持っていれば、自分の家だし犬連れでも、泊まって、近くの山にも行ける』と言って、妻と娘を連れて別荘のようにして使いました。

定年まで頑張ろうと思いましたが我慢しませんでした。退職して、只見に移り住むことを選びました。オリエンタルランド 本社社員食堂のマネージャーとして出向き、この社員食堂が直営になって、マネージャーとして残ったことはお話ししましたが、実はマネージャーって、なかなかストレスの多い職務なのです。直営になって組織が変わり、組織文化も変わりました。当然上司の考え方、組織の方針も変わります。自分が追い求めてきた料理からも徐々に離れて行くのを感じていました。私は料理が好きでマネージャーをしながらも料理に携わることで心の均衡を保っていたのですが、それを超えるストレスが蓄積していったのだと思います。ストレスへの耐性力が落ち、モチベーションにも影響し始めたので退職を選びました。

翌年 2007 年の夏 妻と娘も、只見へ引っ越してきました。これでビストロ叶屋（注4）の全メンバーが揃いました。

（注4）ビストロ

フランス語で「誰でも気軽に利用できる小さな規模のレストランや居酒屋」という意味。小さい規模のフランス料理店や洋食レストラン等、日本食以外を取り扱う小さな飲食店といった意味で使われることが多い。

### 【現在】【健康】【不安】

楽しみにしていること、嬉しいことは、やはり体に良い料理を作り、お客様にゆっくりと食べていただくことです。料理を作っているときは本当に楽しいです。お客様に『美味しかった』とか『良かった』と言われることが、一番の励みです。その一言が欲しくて頑張っています。

何気もないことですが、楽太郎（甲斐犬 7歳）とそこら辺の山に行ったり、散歩したりする時間が楽しいです。また冬になると「奥会津 ただみの森キャンプ場」が雪の原になるので、おやつを持って、楽太郎を連れて出かけます。雪原で楽太郎を放し、娘と私は輪かんじきでガサガサと歩く、これは只見ならではの楽しみです。只見の自然に感動し、四季折々の変化を楽しんでいます。

ただ、この頃なかなか思うように仕込みができない、以前のように段取りよく進まないことがあります。レベルというかパワーがなかなか上がってこない感覚です。71歳を超えてから以前と同じ所要時間では料理できなくなりました。レシピを見ながらの調理も時間がかかったりして、思うように進まずに、疲れることが多くなりました。



ビストロ叶屋 全景写真 (2020/12/8)

妻も私も体力的な限界を感じ“潮時”という言葉を意識することがあります。月に1回 車で会津若松に買い物や妻の通院のために行きますが、いまは大丈夫ですが、だんだん歳を重ねて車の運転ができなくなってきたらどうなるのかと、少し不安を感じることがあります。

二地域居住をしておられる方を見ていると歳を重ねると通えなくなっていますね。年齢とともにライフスタイルも変わってゆく、自然の四季の移り変わりのようにゆっくりと、でも確実に変わってゆくのですね。

一方 体の調子が悪い、パワーが衰えたと言いながらも、お客様が来られると気合が入ってしまい、お客様から『なんだ、調子よさそうじゃないか』と言われてしまったりもします。昔のコックなんて、みんなそんなものだと思います。仕事中はめちゃくちゃ緊張して、調理に取り組むことを長年してきましたので、今でも厨房に入って、ポンとオーダーが入ると自分でも人が変わったように元気スイッチが入ります。その代わりそれが終わると『もう、あかん。もう、あかん』となります。



ビストロ叶屋 全景写真 (2020/12/15)

この頃 寒さがめっきり体にこたえます。来た当初も寒かったのだと思いますが、そこは若かったのでしょう、寒いのが辛いとは思いませんでした。いま冬は、とても寒く感じます。代謝を高めるために漢方薬を飲んだり、朝起きてご飯を食べてから寒いともう一度布団に入り寝てしまったりと、すっかり寒さに弱くなった気がします。

南郷にNクリニックという医療機関があって、そのN先生は、山岳部のOBなのです。そのN先生が言うには『あなたは南の暖かい伊勢で生まれ育ったのだね。歳をとってくると代謝が悪くなって寒さに体が対応できなくなる人が、時々いるのだよ』と話していました。人間ってその土地にいると食べ物や気候に慣れてくるのですが、私は寒さには慣れなかったようです。かつては厳冬期の冬山も登りましたし、マイナス20度の岸壁で2日、3日ビバーク(注5)したこともありました。ちっとも苦にはなりませんでしたが、でも、この2年、3年前まで苦でなかったことが、もう体がついて行けなくなってきましたね。

(注5) 山中で日没状態や体調不良・怪我、予期せぬ天候(雷雨、豪雨、猛吹雪など)で動けない時に行う野営。ロッククライミングなどで、岩棚などで泊る場合を意味する。

血圧の薬は飲んでいますが、大きな病や、特に健康面で注意していることはありません。

昔は山仲間と飲みましたが、最近は飲めなくなりました。妻は、雪堀で紫外線アレルギーになりアルコールが飲めなくなりました。それまでは夫婦二人でちびちびと飲むこともありましたがいまは飲みません。私は仲間がいてワイワイと飲むことが好きで、一人ではお酒を飲みません。ですから晩酌はしたことはありません。飲み会では、そこそこには飲みます。好きなお酒は、やはりワインです。料理との相性を見ながら、例えばこのチーズとあの赤ワインとか、能書きを言いながら飲みます。『この料理とあのワインは合います』って、お客様にお勧めできますからね。仕事のことが頭から抜けていませんね。

## 【変化】

浦安から来ると生活は180度違います。妻には大きなカルチャーショックだったと思います。例えば劇場とか、本屋さんとか、図書館といった文化的なもの、映画館もそうですが、身近にありました。思い立てばすぐに行けたのですが、ここではそれはできません。でも暫くしてからは冬につる細工をするようになってとても楽しみにしているようです。

移住してよかったことはストレスがないことです。例えば通勤とか、仕事、人間関係もそうですね。栄養士の学校を卒業して調理師として働いてきましたし、社員食堂のマネージャーとして働いてきました。自分のためであり、自分の家族のために働いてきました。仕事とはそういうものですが、いまこうして自分のしたいことができるようになったのは幸せなことです。私は幸せだと思います。

また気持ちが穏やかになりました。定期的に正しい生活をするようになりましたので健康になりました。高脂血症という持病を持っていましたが治りました。夜明けとともに起きて日没とともに早く床に就くという生活です。それからやはり自分の時間をたくさん持てるようになりましたので、存分に料理を作り、仕込むことができるようになりました。例えばデミソースは1週間かけて作るとか、フォンドボーを3日間かけて作り、それをベースにしていろいろなソースを作ります。

メニューに「地鶏カレー」というものがあります。これは会津地鶏を使ったカレーで、一つ馴染みの料理を、地元の食材で出したいと思って作りました。これも仕上げるのには3日か、4日はかかります。一つ一つの料理に時間をかけて丹念に作っています。

自分の自宅で商売をしていますから家賃、人件費がかからない（実際には妻や私の労働力はかかっているのですが）ので経費が安く済んでいます。都市部では、自宅を改造するならば可能かもしれませんが、借りれば家賃がかかりますから、今のようなコロナ禍では家賃、人件費、つまり固定費が捻出できない状態で大変ですね。そんなわけで都市部だと経費を捻出するために、本当は自分の作りたい料理があってもコスト的に出来ないものや、時間的な束縛で作れないでしょう。

しかし、ここは時間がゆっくりと流れています。いまはやめてしまいましたがカナダ産の紅鮭を仕入れて、自分で燻製してスモークサーモンを作ったりしてね。ブッフ・ブルギニョンは(注6) なんだかんだで、全行程を終えるまでに1週間ほどかかります。ここではそのようなことができるのです。

(注6) フランス東部地方ブルゴーニュ地方の伝統料理。牛すね肉のブロックをハーブとたっぷりの赤ワインでじっくり煮込む肉料理。

私の仕事はクラシックです。いまから50年位前、昔はなんでも素材から作ったものです。今では鳥でもばらされた部位で届けられますが、昔は一羽丸ごと鳥が来て、それを「腿肉」や「胸肉」(注7) にばらして使いました。一つの材料を余すことなく、出汁を取ったりしていろいろと使ったのです。それでは確かに人件費はかかるし、時間もかかる。私のやり方は今の時代に合わないかもしれませんが、ここでは時間を30年から40年前に戻したように昔ながらの調理方法でじっくりと料理を作っています。

(注7) 「腿肉」や「胸肉」

「腿肉」はコクがあり鶏の出汁が良く出る。「胸肉」はさっぱりした淡白な味が特徴。

## 【アドバイス】

これから移住する方へアドバイスですが、一つには住んでみないとわからないことがあるということですね。例えばリフォームするとしたらどこにお願いしたら、どのようなリフォームをしてもらえるのかね、やはり地元の人を持っている情報が大切でしょうか。長く通っていても、その間はあくまでも「お客様」扱いですからね。私たちは家族3人で住み始めて13、14年で、かなり地元と同化してきています。それでも地元の人から見れば、私たちはいまだに異質に見えるでしょうね。住んでみないと分からないことがあるということですね。

## 【生活】

ここに来るまで知らなかったことですが、この叶津区というところは特に血縁の濃いところで、ほとんど親戚縁者なのですね。幸いにも自然に溶け込んで、みんなでワイワイとやっています。よく大根、キュウリ、ネギとか白菜など、いっぱい採れると分けてくれたりします。それに対して、私は『〇〇を作ったので食べてください』って、そんなものでちょっとしたお返しにしたりして、行ったり来たりしています。

また地域の行事には積極的に参加すると、お互いに顔を覚えますしね。行事で苦勞を一緒に分かち合えば、作業を通じて、お互いに溶け合っただけののだと思います。例えば「大堀払い」、「節分の豆まき」、「草刈り」とかいろいろ。

都市部でいえば町会費に似ていますが「賦課金」というものを納めています。区民というのは、区の財産（権利）も含めた区民という意味になります。私たちのようによそから来た者は、田畑というものは持たないし、共有財産という意味では区民ではありません。もともと先祖代々ここにいて共有部分の財産を共有しているというのが区民ですね。只見だけでなく、どこでも、中山間部では人口が減っています。地方自治体は、全国みな同じなのではないでしょうか。

年齢が高くなるとやはり病気がちになりますね。75歳を過ぎても都市部なら公共交通で、病院にも、買い物にも、すべてのところに通えます。車がなくてもことが足りる、生活ができます。その分 都市部で災害がおきたときはパニックになって大変なことになるのですが、これは仕方ないと思うしかないでしょう。

只見の良いところは災害に強いということです。大地震に強く、津波はない。2011年の夏に大水害（注8）がありましたね。1か月位孤立して、自衛隊が派遣されて大変でしたが、周りを見れば飲み水になる水源はそこかしこにあります。水洗トイレの水だって自分で、バケツで汲んできて流せば済む。ガスはプロパンで各家庭にあり食事の用意もできる。さすがに夏の大水害で、電気は一時止まりましたが、すぐに復旧しました。夏だったので暖房する必要もなく暮らせました。ここら辺は陽が落ちると涼しくなるのです。明るくなったら起きて、暗くなったら寝る感じですね。

#### （注8）2011年の夏に大水害

2011年（平成23年）7月27日から30日にかけて、新潟県と福島県では記録的な大雨に見舞われ大きな被害が発生、「平成23年7月新潟・福島豪雨」と命名された。

日本海から東北地方南部にかけて停滞する前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込み大気の状態が不安定となった影響で、新潟県から福島県会津地方にかけてはレーダー解析で1時間に100mmを超える猛烈な雨が続いた。新潟県三条市と福島県只見町で1,000mmを超えた地域もあった。

この豪雨で、新潟県から福島県会津地方にかけて堤防の決壊、河川の氾濫が相次ぎ、死者・行方不明者6人、損壊・浸水家屋10,000棟以上の大きな被害となった。また、JR只見線は橋梁の流失などの甚大な被害を受け、現在も福島県内の一部区間で運転できない状態が続いている。

以前に住んでいた団地の話ですが、一つの信号から次の信号の間に、縦に人間が4,000人位 住んでいる訳ですよ。そんなところで災害がおきたら電気、トイレ、エレベーターも使えない、それは大変ですよ。東日本大震災の時には、浦安では液状化現象がおきて1か月近くトイレが使えなくなってしまいました。都会は災害には弱いですね。

かたや地方では災害がおきても、ここらあたりではどの家庭も1か月分くらいは食料の備蓄はあるし、もともと自給自足のような生活で、不便なことはあったとしても生死の問題になるようなことはないですね。

### 【印象】

移住して最初の印象は「自然の中で生かされている、生きている」って感じで、四季折々の中で生活の仕方があるのだなと鮮明に感じました。ここは標高350mなのですが、雲が出たり、霧が出たりして、それらが山の中腹を這うように動くのを見ると、2,000m近くの標高にいるような気がして、アルプスとか奥多摩に住んでいるような感覚が湧きました。天候が悪くなって雨が降りだすと、まるで山小屋で遭遇した悪天候のようで「なんだか山小屋にいるようで懐かしい」と思いました。県境近くの山の中に入り込んでいる地形的なことから気候は激しいです。これも住んでみなければわからないことでした。

2020年11月18日 ビストロ叶屋にてインタビュー  
インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博